

Fouquier, Marcel. *Paris au XVIII^e siècle ses divertissements—ses mœurs ; directoire et consulat*. Paris, Émile-Paul, 1912. 146p. with illus. 39.8×29.0 cm <382.35-F>

Hiler p. 323

『18世紀のパリ』の第2部である。第1部「フォリー」(folie 娯楽のための家)と同様に数多くの精巧な版画を含む、アルシェ紙146頁からなる豪華本で550部が限定出版された。

内容は、副題に「総裁政府時代と統領政府時代の娯楽と風俗」と記されているように、フランス革命後の1795年から1804年までの10年間、すなわち総裁政府時代1795—1799年、統領政府時代1799—1804年における風俗とこの時代に流行した様々な娯楽について多くの版画によって視覚的に解説したものである。第1部ではフォリーの建築的側面と、それを彩った当時の精神的傾向を描写しているが、本書では、さらに、そうした世情を反映しながら人々はどのような娯楽を持ち、うさばらしに興じたのかを明らかにしようと試みている。

時代背景となったのは、革命色の濃い18世紀末であった。これより少し前、ヴォルテール、モンテスキューの思想に基づく法の前の平等と主権分権のもとに成立する新しい社会構想が急速に広がっていった。サロンだけのものであった哲学は一般人の間にも浸透しはじめ、新しい要求に応じ得るルソーの思想が流行した。次第に物質主義がサロンに侵入し、中産階級では新興勢力・ブルジョアジーが台頭すると、相対的に貴族の地位は下降した。旧体制下、王に対して膨大な経済的負担と無為な精神的奉仕を強いられていた貴族たちは、すでに、このような人為的生活のむなしさに気づいており、自然な感情を享受する生活にもどりたくと望んでいた一方、打ち続く戦争で田畑は不毛の地と化し、惨状きわめていたにもかかわらず、税金は農民に重くのしかかっていた。すべての階層で、人々は疲れ果て、〈変化〉が待ち望まれていた。——旧体制はこうして消滅した。

革命後、人々は新体制の勝利に酔い、祭りにつぐ祭りにあけくれる。記念祭、舞踏会、コンサートが町の広場やサロンで十年近くもの間、休みなく続けられる。人々は意識的に政治を忘れ、うさばらしをすることのみを考える。

こうして当時の人々の要求は、種々様々な娯楽や楽しみを作り出したのであり、本書はこうしたフランス革命の裏側に存在した遊びの歴史と、当時の風俗を知る上で大変興味深いものとなっている。

なお、作者フーキエは『18世紀のパリ』、第1部、第2部の他には著作がない。(深井)